

カナダへの定住を人にすすめられ、一時は迷ったものの、結局踏ん切りがつかず、日本へ帰国——そういう惑いの時期が、私にもあった。わが三十代後半のころである。踏ん切りがつかなかったのは、根（ルーツ）の問題がからんでいたからである。私は、自分とはかくとして、家族にまで、日本に下ろしている根を引っこ抜き、それをカナダという異質社会に植え変える苦しい作業を強いる気には、どうしてもなれなかったのである。ある

いは、この家族云々というのは、たんなる口実だったのか。ほんとうは、自分自身の根の移植に自信がなかった、ということだったのかもしれない。とにかく私は帰国した。このときの私の選択の可否を、いまここで問うまい。ただ、私はその後、たえず「根」の問題——それが人間にとってもつ重要性——を意識しつつけるようになった、ということだけはいえそうである。

オタワ在住のA君のことを考えるたびに、私は自分の人生におけるこの惑いの時期と、そのときの選択とを想起しないわけにいかない。A君は、私と異なった選択をしたからである。彼は、自分の根などに拘泥せず、カナダに定住する道を選んだ。私とA君は、戦後、同じ時期に同じ大学を卒業しているのだが、知り合ったのは、一九六〇年代始めのオタワだった。しかし何といても、日本の戦中戦後の共通経験をもつ同じ世代。話がツーカーと通じる気安さもあり、かなり親しく付きあうこととなった。その後オタ

ワを去った私と定住を決意してオタワに居残ったA君は、しばらく賀状の交換くらいはしていたが、それもいつしか途絶えてしまった。

昨秋、十数年ぶりでオタワへ舞い戻った私は、このA君を思い出し、同君がまだオタワに在住していることを確かめ、電話を入れてみた。突然の電話にA君がすぐに私を思い出せなかったのは、別にふしぎでなかったが、私をもっと驚かせたのは、同君の徹底した「日本離れ」だった。最初は、日本語もろくに通じないのである。それでも話しているうちに、同君の現況や身辺の事情が、おぼろげながら分かってきた。A君はカナダへ来て

外国生活と「根」の問題

平野 敬一

から二十年以上にもなるが、その間、ただの一度も帰国せず、日本のことを意識から排除し、日本語とも縁を切り、ただひたすらカナダ社会（それもその中の白人社会）への同化に努めてきたらしいのである。根は、とつとつに断ち切れていた。これも一つの生き方。私に、あれこれいう資格はないが、気になったのは、電話から伝わってくる同君の生気のなさだった。なにか敗残のにおいのようなものが、漂ってくるようにすら感じられた。

その後、私はある席で偶然A君の勤め先の直属上司に会うことができた。私は気になっていたA君のことをそれとなく

きいてみた。結果は案じていた通り。かんばしくないのである。A君は、対人的にも、仕事の上でも、うまくいっていない、とその上司は卒直に教えてくれた。

あるいは何か個人的な事情があるのかも知れず、それ以上具体的なことを聞くのを私は控えたが、A君は自分の「根」を否定した当然の報いを受けているのではないかと、という思いを私は抑えることができなかった。なにか大事なものが枯渇して、カナダというこの包容力ゆたかなモザイク社会にすら適応しえなくなったのではないかと。そんな思いがした。

私の連想は、A君から、昨年ニューヨークで会った若い日本の商社員B君へと

飛ぶ。日本の大企業に所属するB君にはアメリカ定住などという気持はさらさらない。もちろん自分の「根」を否定する悲壮さも持ち合わせていない。それどころか、その「根」から、どんらんと思われるほど、日々に養分を吸収して当然だと心得ている。

B君の勤め先には、日本から直行便で日本の新聞が毎日入るようになっていて、もちろんB君はそれを精読する。したがって、かつて辺島で筆者を悩ませたような「情報の枯渇」にB君はまったく縁がない。巨人軍の江川投手が目下何勝何敗、といったような雑多な情報にまで通じ

ているのである。せっかく外国生活を送る機会を与えられながら、これでは日本に在るのと変らないでないか、もったいない話だ、と慨嘆するのは、私のような年配者の感覚であって、B君はB君なりの流儀で、充分外国生活にときこんでおり、アメリカ人相手の仕事にも着々と成果を上げているようだった。B君は日本からの情報をたっぶり吸収しながら、それをエネルギー源にして（ポパイのホウレン草の如く）、仕事をしている感じだった。とにかく生きがいなのである。

私はB君をオタワ在住のA君の場合と比べてみないわけにはいかなかった。とかく悲壮になったり、感傷的になったりする傾向の強い私の世代に属するA君と、万事カラッとして感傷抜きに割り切れるB君との世代の違い、ということになるのかもしれないが、自分の「根」からの養分吸収を拒否した特殊なケースと、どんらんに養分を吸収しているケースとの違い、ということにもなりそうである。

外国生活を送る形としては、A君の行き方もB君の行き方も、それぞれ極端に走りすぎているのかもしれない（黄金の中庸はその中間か？）。しかし、無理がないという点で、私には、まだしもB君の行き方のほうが健全であるような気がする。人間、自分の「根」を否定していると、正体不明のノン・パーソンになりかねない。どんな社会でも、こういう正体不明人を、あまり歓迎しないのではなからうか。なにもカナダに限らない。

（東京大学教授）